



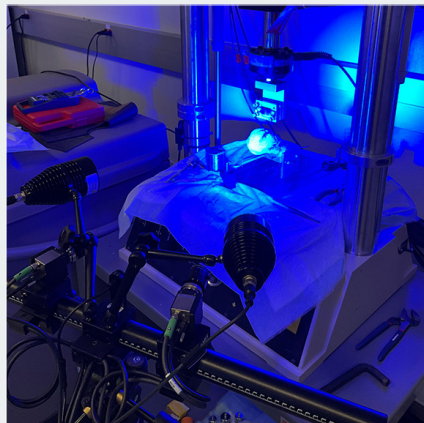
一般社団法人

日本肩関節学会

Japan Shoulder Society



Newsletter



2024.07

vol. **22**

002 理事長あいさつ

003 第51回日本肩関節学会学術集会 会長あいさつ

004 第52回・53回日本肩関節学会学術集会のお知らせ

004 学術論文紹介

JSES掲載：2022年 Best Abstract より

第1回国際論文奨励賞受賞者の声

学術委員会報告「広範囲腱板断裂アンケート調査結果」

010 海外留学だより

日本大学整形外科 矢作 善之

札幌医科大学 水島 衣美

山形県立保健医療大学大学院 理学療法士 星川 恭賛



019 各委員会報告

雑誌「肩関節」編集委員会

国際委員会

高岸直人賞決定委員会

社会保険等委員会

教育研修委員会

学術委員会

広報委員会

財務委員会

リバース型人工肩関節運用委員会

日本肩の運動機能研究会運営委員会

用語委員会

選挙管理委員会

50年史編纂委員会



029 ホームページリニューアルのお知らせ

030 事務局からのお知らせ

031 編集後記

理事長あいさつ

一般社団法人 日本肩関節学会 理事長 菅谷 啓之

第5代理事長を拝命してから既に2期目も8か月を過ぎ、任期も残すところ4か月となりました。現在理事は7名と定員上限の10名より3名少なくなっており、各理事が平均して3つの委員会を担当するというある意味異常な状態になっております。6月1日から30日までが新理事の立候補届け出期間です。伊崎輝昌理事、高瀬勝己理事と私は今回で退任いたしますが、若手の気鋭の先生方の立候補を期待しており、できれば10名の理事は確保したいところです。また、新代議員も本年は10名の募集を行うことになっており、是非とも多くの若手の先生方に立候補して頂き、日本肩関節学会の活性化を図って頂きたいと考えております。さて、これら役員の選出方法ですが、コロナ禍の2020年から2023年までWEB投票で行って来ました。コスト面や社員総会時の時間短縮、集計の効率化を考慮し、今後もWEB投票を継続していく方向で理事会の意見がまとまり、現在、田崎篤委員長を中心とする選挙管理委員会で検討された白票や無効票の扱いを含めた改正案が理事会を通過し、定款等委員会の審議を経て役員選出規則が改定される予定です。



さて、コロナ禍を経て海外ではAAOS、SECECやアジア肩などの国際学会やParis Shoulder、Nice Shoulder、San Diego Shoulderなどの肩に特化したCourseや研究会がコロナ前と全く変わらずに行われるようになっており、日本からも多くの先生方がこれらのイベントに参加をしております。一方で、種々の非日常的な国際情勢と日銀の為替政策も相まって異常な円安と物価高が続いており、例えば米国に出張するとコロナ前の2倍近くの費用がかかります。このような状況ですので、国際学会の参加に関しては以前より制限のかかることは致し方ないとしても、WEBの活用などで積極的に海外動向の把握と国際交流を図って頂きたいと思います。一方で、トラベリングフェローの交流は以前にもまして盛んになってきております。9月にはASESフェローの派遣と受け入れ、SECECフェローの派遣を行う予定です。また、現在、来年3月派遣するKSESトラベリングフェローの募集を行っております。8月31日が締め切りですので皆様奮ってご応募下さい。

最後に、50周年を迎える秋の京都での第51回日本肩関節学会も今井晋二会長のもと着々と準備が進められております。記念すべき節目の学術集会が昨年以上の大盛会となりますよう、皆様どうぞ御協力の程お願い申し上げます。

第51回日本肩関節学会学術集会 会長あいさつ

滋賀医科大学 整形外科 今井 晋二

第51回日本肩関節学会学術集会を主催させていただきます滋賀医科大学整形外科の今井晋二でございます。伝統ある日本肩関節学会学術集会を滋賀医科大学整形外科で主催させていただける事は、この上ない光栄でございます。また、この度の日本肩関節学会学術集会の準備におきましては日本肩関節学会の会員・代議員・役員の先生方に一方ならぬご厚情を賜り、厚く御礼申し上げます。



兼ねてよりお知らせしておりますように第51回日本肩関節学会学術集会は2024年10月25日（金）～26日（土）に国立京都国際会館で準備しております。今回の学会のテーマは「Cutting Edge Science for Shoulder」と致しました。原意は「ステーキにナイフを入れた瞬間の、肉汁のしたたるような切り口（Cutting Edge）のように旨い、肩関節に関する科学」となります。

欧米より5名、韓国から4名の先生方をお招きしています。国際シンポジウムが6セッション、企業共催国際セミナーは6セッションを予定し、海外の第一線の先生方と共に「肩関節のCutting Edge Science」をご紹介いただきたいと思います。

国内パネルディスカッションが6セッション、シンポジウムは3セッション、企業共催ランチョンは9セッションを準備し、日本肩関節学会役員・代議員の先生方を中心に国内の第一線先生と共に「肩関節のCutting Edge Science」をご議論していただきたいと思います。

肩の運動機能研究会では優秀演題賞（副賞10万円）×1名、準優秀演題賞（優秀演題賞の次席）（副賞5万円）×1名、若手演題奨励賞（副賞5万円）×1名を設け、運動機能研究会の「肩関節のCutting Edge Science」を盛り上げたいと考えています。

コロナによって少し下火気味になっていた全員懇親会も完全復活の形で行います。10月25日（金）の最終セッション、海外招待者のお一人Pascal Boileau先生による国際セミナーから引き続いて19時から学会会場と同じ国立京都国際会館の「さくらの間」で予定しています。10月25日（金）の夕刻は学会場から離れられません。

秋の京都は風光明媚で観光にも最適です。特にコロナ後はインバウンドも回復し、海外からの観光客数はコロナ以前をはるかに凌駕するとも言われています。第51回日本肩関節学会学術集会では、会場近くのホテルと京都市内のホテルも一定数確保しています。根強いご要望のあったaccompanying personsのエクスカージョンも予定しています。無論、会員も参加できます。ぜひ、ご家族連れでお越しください。

秋の京都での「Cutting Edge Science for Shoulder」は、明日からの貴方・貴女とあなたの臨床を変える事でしょう。

第52回・53回日本肩関節学会学術集会のお知らせ

第52回日本肩関節学会

学術集会会長：伊崎輝昌（福岡大学筑紫病院 整形外科）

併催：第22回日本肩の運動機能研究会

研究会会長：三宅智（福岡大学医学部整形外科教室）

【開催日】2025年10月10日（金）～11日（土）予定

【開催場所】福岡（福岡国際会議場）予定



第53回日本肩関節学会

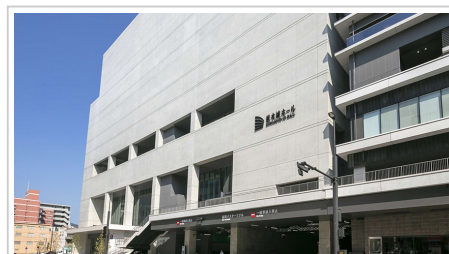
学術集会会長：北村歳男（熊本整形外科病院）

併催：第23回日本肩の運動機能研究会

研究会会長：菊川憲志（熊本総合病院 整形外科）

【開催日】2026年10月30日（金）～31日（土）予定

【開催場所】熊本（熊本城ホール）予定



学術論文紹介

JSES掲載:2022年 Best Abstract より

東千葉メディカルセンター 整形外科 千葉大学大学院総合医科学講座 特任助教 **稲垣 健太**

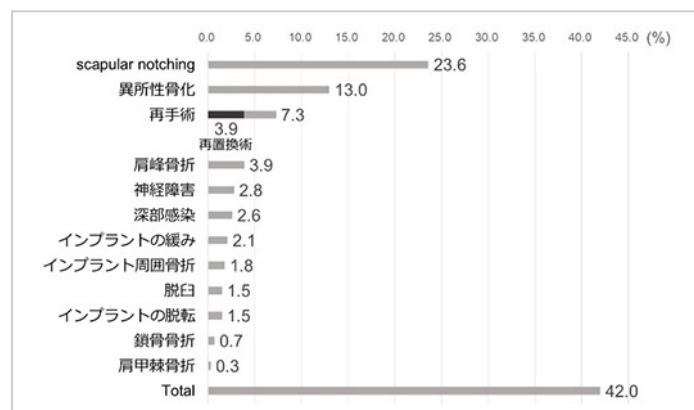
この度、2023年にJSES Internationalに掲載された” Postoperative complications of reverse total shoulder arthroplasty: a multicenter study in Japan”を優秀論文に選んでいただいたことに感謝申し上げます。本論文の内容は第49回日本肩関節学会で発表させていただきました。

本邦では2014年から反転型人工肩関節置換術が行えるようになり、これまで対応に苦慮していた腱板断裂性肩関節症や修復不能な腱板断裂などに対する治療選択肢が広がりました。一方で、海外の報告では比較的高い合併症率が報告され、体格の異なる日本人における合併症の発生状況を調査する必要性がありました。そこで、千葉大学医学部附属病院とその関連病院である船橋整形外科病院、千葉メディカルセンター、聖隷佐倉市民病院、さんむ医療センター、千葉ろうさい病院の6施設で反転型人工肩関節置換術後合併症に関する多施設研究を行いました。

合計615例（平均経過観察期間45カ月）を対象とし調査したところ、図1に示す通りの合併症発生率でした。その割合は海外の報告と同等で、体格差や人種差の影響は小さいと考えられました。最も頻度が高かったScapular notchingはIn-layタイプのインプラントに多く発生していましたが、術後可動域への影響はありませんでした。また、可動域は術後有意に改善し、再置換術をエンドポイントとした5年生存率は96.3%と良好な

臨床成績でした。一方で、インプラントの脱転、術後感染症、脱臼は高率で再置換術を要しており、注意すべき合併症と考えられました。

本研究は、国内で初めての反転型人工肩関節置換術後の合併症に関する大規模な調査となりました。多施設研究であり、多大なご指導・ご協力をいただいた先生方、各病院に深く感謝申し上げます。



反転型人工肩関節置換術後の合併症割合

第1回国際論文奨励賞受賞者の声

倉敷中央病院 高山 和政

今回このような栄えある賞を頂き、身に余る光栄です。JSES以外にも優れた雑誌は沢山あるなかで、偶々4編アクセプトされたまでの事と謙虚に受け止めております。またこの場をお借りしまして、関係各位には厚く御礼申し上げます。

本稿は、臨床現場で孤軍奮闘する若い先生方や、論文執筆や発表をやって行きたいけれど、どうやっていいかわからない、一歩踏み出せない先生方へのメッセージになればと思い書かせて頂きます。

私が肩関節外科医を目指したのは卒後7年目の夏になります。経緯は紆余曲折ありましたが、やるからにはしっかりと治療ができるようになろう、と意気込んでおりました。しかし、私には肩関節手術を指導してくれる上席医はおらず、また肩部門を一から興す必要もあり、大変な遠回りをしたかもしれません。けれど仲間には恵まれました。手術技術の習得のために、多くの先生方のキャダバースタディーや手術見学、研究会に参加させて頂きました。またAmazonで購入できる肩関連の洋書は片っ端から読んでいきました。まず、「知ること」、から始めるのは非常に重要だと思います。手術技術は一朝一夕では身に付きませんが、知れば明日から変わることができるからです。肩関節の手術、特に関節鏡は、初学者にはなかなか敷居が高いものです。やり始めた頃は長大な時間や大量の灌流水を消費します。そのせいか、手術室からは冷たい視線を向けられるのですが、そのことで怯んで安直に鏡視下手術を断念、直視下手術へコンバート、などしてはいけません。一度逃げ道を作ると、それに頼るようになります。また手術室からも「どうせ最後はあけるのだろう、どうせなら早く開けてやってくれ」と思われてしまいます。鏡視下で必ず完遂するのだという、不退転の気概をもって臨んでください。不思議なことに40例を超えてくると手術は早くなり、また余裕も出てくると思います。

私は幸いにして多くの症例に恵まれました。症例を重ねるなかで、様々な「なぜ?」がありました。「なぜ?」は、よりよい医療を目指そうと希求する突端にあるものだと思います。その「なぜ?」を解決するために仮説を

たて、実行し、検証して参りました。思えばそれは、論文執筆における過程そのものでした。多くの症例を通じて、自分の「なぜ?」とその検証を、論文という形式で世に問いたいと思うようになりました。論文を書くということは、時の洗練を受けることになります。科学は演繹法によって積み上げられていますが、その過程で脚光を浴びるものもあれば、非難を受け、やがて忘却されてしまうものもあると思います。非常に残酷な現実だと思いますが、これに挑む論文執筆という行為は、敬虔なものといえるかもしれません。

いざ論文執筆したくても書き方がわからない、英語に自信がない、そうお考えではないでしょうか。私は大学院に行っておりませんし、留学経験ありません。また執筆にあたり指導教官もおりません。Nativeの英語はほぼ聞き取れませんし、片言しか話せません。大学受験レベルの英作文と読解力がある程度です。英語論文において格調高い表現は全く必要なく、fool-proof englishで十分です。統計についても同様で、高度な統計技法は必ずしも必要ありません（使えるに越したことはありませんが）し、統計ツールもEZR等のフリーソフトで十分に対応可能です。様々な書籍やweb上で閲覧できる内容で、実は論文執筆は可能なのです。そして臨床における「なぜ?」に対し、仮説を立て、実行し、検証する。これら一連の行為は実は論文執筆そのもののなのです。

初めてJSESにアクセプトされたのを見たとき、それは夜だったのですが、とても嬉しかったのを覚えています。そして朝目が覚めてもまだ嬉しかった。その達成感を若い先生方にもどうか味わって頂きたいと思います。

最後になりますが、臨床医としての礎をご指導頂きました、故・百名克文先生に心より感謝申し上げます。

Journal of Shoulder and Elbow Surgery

1. Clinical outcomes and temporal changes in the range of motion following superior capsular reconstruction for irreparable rotator cuff tears: comparison based on the Hamada classification, presence or absence of shoulder pseudoparalysis, and status of the subscapularis tendon
2. Acromial and humeral head osteolysis following superior capsular reconstruction using autologous tensor fascia lata graft

JSES International

1. Ultrasound-guided interscalene block anesthesia performed by an orthopedic surgeon: a study of 1322 cases of shoulder surgery
2. An anatomical study for the location of suprascapular and spinoglenoid notches using three-dimensional computed tomography images of scapula

大阪医科薬科大学 整形外科 長谷川 彰彦

この度、第一回の国際論文奨励賞をいただくことができました。まずはこの賞を設けていただきました日本肩関節学会の理事、代議員の先生方に御礼申し上げます。

この場をお借りして、今回、受賞に至った3本の論文を簡単に紹介させていただきます。

1つめは、ウサギ肩を使ったSCRの組織学的研究「Histologic changes during healing with autologous fascia lata graft after superior capsule reconstruction in rabbit model.」です。いつもSCRの手術見学にいらっしゃる先生方に、「グラフトは本当に治癒するの?」という質問をいただいておりますが、この研究で日本白色家兎にSCRを行い、移植した大腿筋膜グラフトが術後16週で上腕骨側、肩甲骨側ともに骨縫着部で線維軟骨を新たに形成して治癒することと、筋膜実質部が正常な靱帯様組織へとリモデリングされて行くことを明らかにすることができました。

2つめはSCRの臨床研究「Structural and Clinical Outcomes After Superior Capsule Reconstruction

Using an at least 6-mm thick Fascia Lata Autograft Including the Intermuscular Septum.」です。この研究はSCRの後療法を決めるにあたり、「グラフト断裂はいつどの様にして起こるのか?」という疑問を解決するために行いました。結果、グラフト断裂例は77%が術後6か月以内に生じ、断裂部は大結節から骨頭直上であることから、グラフト治癒過程における肩峰下インピンジメントが関与しているであろうことを明らかにしました。これら2つの研究結果をもとに、SCR術後の重労働、スポーツ復帰は術後6か月以降を推奨すると説明を行っています。

3つめは単純X線の濱田分類と腱板・上腕二頭筋長頭腱の関係を調査した「Relationship between the Hamada Grade and underlying pathological conditions in the rotator cuff and long head of biceps in symptomatic patients with rotator cuff tears.」です。この研究では単純X線評価で一般的に用いられる濱田分類の各グレードごとに腱板断裂の大きさや筋脂肪浸潤の重症度、上腕二頭筋長頭腱損傷の重症度を比較検討し、Grade2以上では棘下筋腱にまで断裂が及んでいること、Grade3以上では肩甲下筋腱断裂の、Grade4以上では上腕二頭筋長頭腱断裂の合併頻度が上昇することを示しました。この結果は、日常臨床でよく使用している単純X線検査から、患者さんの病態を予測する上での一助としています。

この受賞を励みに、今後もClinical questionを解き明かす研究をできればと考えています。

最後に、いつもご指導いただいております三幡輝久先生と、大阪医科薬科大学肩班の皆様に感謝いたします。

Journal of Shoulder and Elbow Surgery

1. Structural and Clinical Outcomes After Superior Capsule Reconstruction Using an at least 6-mm thick Fascia Lata Autograft Including the Intermuscular Septum
2. Histologic changes during healing with autologous fascia lata graft after superior capsule reconstruction in rabbit model

JSES International

1. Relationship between the Hamada Grade and underlying pathological conditions in the rotator cuff and long head of biceps in symptomatic patients with rotator cuff tears

麻生整形外科病院 芝山 雄二

このたび国際論文奨励賞という名誉ある賞を賜り、大変光栄に存じます。このような賞の創設にご尽力されました委員会の先生達と、論文に関してご指導いただきました廣瀬聰明先生には深く感謝申し上げます。

今回受賞の対象となった論文の二つは放射状MRIに関する論文です。放射状MRIは腱板付着部に対して垂直にスライスを作成することができ、特に肩甲下筋腱、棘下筋腱の断裂サイズを正確に計測することができます。これを応用し、それぞれの断裂サイズから断裂面積を算出する方法を考案しました。それをを用いて、一次修復を行った肩腱板断裂の症例に対して、術後の再断裂を評価し、修復群と再断裂群に分けて危険因子を評価したところ、断裂面積が 6.3cm^2 を超えると有意に再断裂率が高いことがわかりました。この自分で得たデータを基に術前に放射状MRIから断裂面積を計算し、 6.3cm^2 を越えない場合は一次修復、越えた場合は上方関節包再建や棘下筋回転移行術を行う方針とし、臨床応用しております。今後はこのように手術を行った症例の術後成績を評価していきたいと考えております。

また従来のMRIでは診断率が低かった上腕二頭筋長頭腱(LHB)の部分損傷においても放射状MRIは高い診断率を示しました。術前にLHB損傷の有無を把握することはもちろん重要ですが、保存治療を行う外来患者の診断においても威力を発揮しています。放射状MRIは通常のMRI機器で撮影できますし、5分程度の追加で撮像ができ、放射線技師に依頼すれば特に問題なく撮像してくれますので、皆様もご検討頂ければ幸いです。

もう一つの論文はCritical shoulder angle(CSA)についての研究です。CSAは35°以上で腱板断裂、30°以下で変形性肩関節症のリスク因子となるレントゲンでの計測値ですが、本当に正確に評価できているのかというのを臨床上で疑問に持っていました。札幌医大の放射線技師と相談したところ、3D-CT画像で関節・肩峰下面の裂隙を明瞭に描出できる位置でレントゲンに類似した画像(仮想Xp)に変換できる手法(レイサム表示)を用い、仮想Xpを基準とした時の撮影Xpとの誤差を調査しました。2°以上の誤差が生じた症例は42%との結果であり、CSAを診断に用いる場合はより正確なレントゲンが必要であるとわかりました。

最後に、この賞を取りたいというのが論文作成のモチベーションになり、また論文が採択されたときは本当に嬉しかったです。この賞を頂いたことを励みに、臨床と研究へより一層真剣に取り組み、社会に貢献できるように頑張りたいと思います。ありがとうございました。

Journal of Shoulder and Elbow Surgery

1. Reliability and accuracy of the critical shoulder angle measured by anteroposterior radiographs: Using digitally reconstructed radiograph from three-dimensional computed tomography images

JSES International

1. Relationship between preoperative size of rotator cuff tears measured using radial-slice magnetic resonance images and postoperative rotator cuff integrity: a prospective case-control study
2. Diagnostic accuracy of magnetic resonance imaging for partial tears of the long head of the biceps tendon in patients with rotator cuff tears

学術委員会報告「広範囲腱板断裂アンケート調査結果」

南長野医療センター篠ノ井総合病院 整形外科 石垣 範雄

2022年度に本学会員の先生方を対象に「腱板広範囲断裂に対する手術療法」につき学術委員会よりアンケート調査を行い、調査時の正会員数1642名中355件(21.6%)の有効回答をいただきました。

回答いただいた方の層分けでは会員歴5年未満10%、5年以上10年未満21%、10年以上20年未満43%、20年以上26%で、腱板断裂関連手術の執刀数は50例以上100例未満が最多で(20例未満24%、20例以上50例未満30%、50例以上100例未満31%、100例以上15%)、広範囲断裂の定義として用いている分類はCofield分類が過半数を占めていました(Cofield分類52%、Gerber分類19%、Patte分類19%、Schumaierコンセンサス5%、Collin分類4%、その他1%)。広範囲断裂の手術を前提とした上で重視する項目は年齢・活動性が最多(31%)で、筋力低下(24%)、疼痛(20%)、画像所見(19%)の順に評価されていました。自動挙上90度以上不可能な症例に対し手術を行うタイミングは、1~3ヵ月間の保存療法を行った上で回復しない場合という意見が最多(58%)でした(すぐに行う6%、1ヵ月保存療法の上で行う10%、3~6ヵ月保存療法の上で行う24%、6ヵ月以上保存療法の上で行う1%、手術を行わない1%)。一次修復が困難と術前に予想される症例で最も重要視する治療方針は、65歳未満の症例ではほとんどの回答者が何らかの軟部組織手術を選択され(96%)、人工関節手術の選択は1%にとどまっていた。一方で、65歳以上の症例では、人工関節手術の選択が最多でした(59%)が軟部組織手術も39%の支持を得ていました。一次修復を目指す場合の追加処置は、関節包切離(27%)、烏口上腕靱帯解離(22%)およびアンカー設置位置の内側化(29%)

が多く選択されていました。一方で、マージンコンバージェンス（9%）やインターバルスライド（前方6%、後方5%）の選択は少ない結果となっていました。一次修復が術前に困難であると判断された症例では、リバース型人工肩関節の適応であると判断した回答者が最大でしたが、65歳以上であっても関節可動域が保たれている症例には部分修復術の選択が最多となっていました（図1、2）。今回のアンケート調査によって、有効回答率が比較的低率であった問題点は残るものの、日本国内における腱板広範囲断裂に対する治療の現状について明らかとなりました。この結果が腱板広範囲断裂症例に対する治療方針決定の補助資料となることを期待しております。

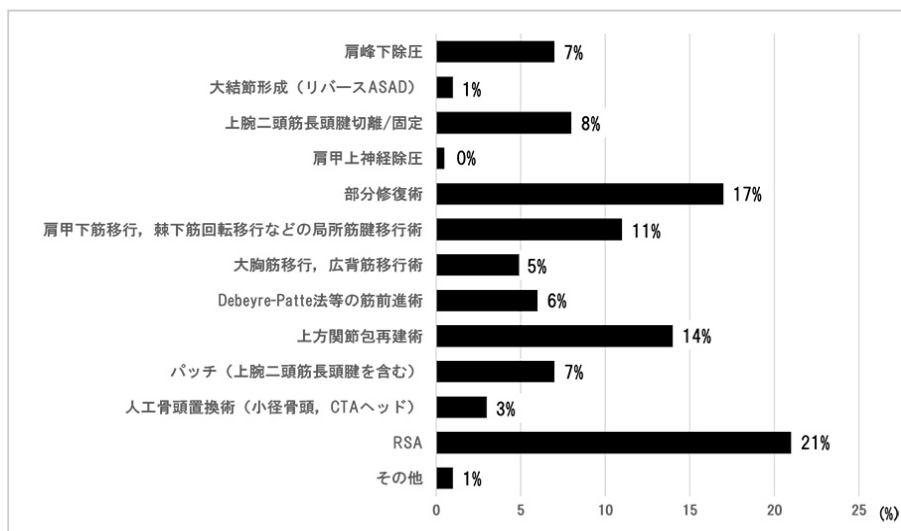


図1：一次修復困難と判断された場合に選択する術式（複数回答可）

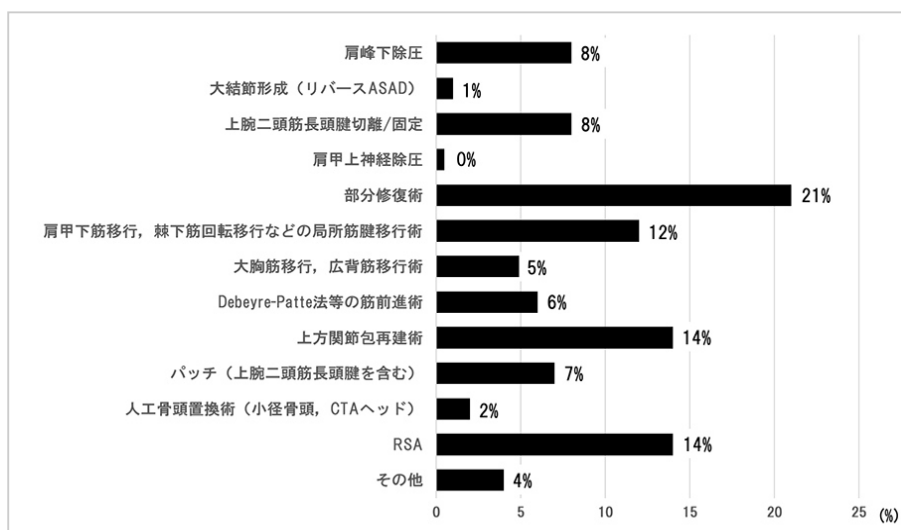


図2：一次修復困難とされた症例のうち、自動挙上可動域が保たれ（90°以上の挙上が可能）かつ65歳以上の症例に対する術式選択（複数回答可）

海外留学だより

日本大学整形外科 矢作 善之

1. 自己紹介

私は日本大学整形外科の矢作善之（やはぎよしゆき）と申します。川崎医科大学を2011年に卒業後、2013年に父と同じ日本大学整形外科医局に入局しました。スポーツ医学研究班に所属し、臨床では主に膝及び肩の関節鏡を中心に手術を行い、研究では2020年に膝関節の解剖の研究で日本大学大学院で博士号を取得しております。

2. 海外留学を行うことになったいきさつ

日本大学のスポーツ医学研究班では代々ピッツバーグ大学のACL再建で高名なDr. Fuの元に留学に行っておりました。しばらくDr. Fuへの留学者が途切れておりましたが、スポーツ医学研究班の先輩の先生方よりぜひ機会があれば留学に行くべきだとの勧めもあり、留学することとなりました。当初は2021年に留学を予定しておりましたが、我が子がオペで数か月間の入院が必要となり、留学を延期し、その間にDr. Fuがお亡くなりになるなど紆余曲折がありましたが、後任のDr. Musahlにメールしたところ快く私を受け入れて頂き、2023年4月から1年間留学に行くことができました。

3. 海外での留学や生活について不安だったこと、そしてその不安について現在はどう感じているか。

海外で不安であったことはやはり英語でのコミュニケーションに不安を感じておりました。また、ピッツバーグ大学への留学に際し、2022年より英会話の最低限の能力が必要とのことで試験を受ける必要があると言うことを言われた時も正直焦りました（基準はDuolingo English Testで90点以上）。なんとか95点でクリアできてほっとしました（同時期に留学していた他の日本人フェローも95点だったようで安心しました）。

1年間の留学を経て現在の英語力はどうかと言われると留学前よりはコミュニケーションをとれますが、ネイティブの英語は相変わらず聞き取りがうまくできないなど、まだまだだなと感じておりますが、留学前と比べると少しは英語でコミュニケーションがとれるようになっていいると実感しております。

4. 海外留学について家族に話した際の反応、海外での生活に関して

妻は海外留学に行くことに非常に好意的であり、喜んでアメリカに来てくれました。私よりも英語でのコミュニケーションが堪能であり、インド人やトルコ人の友人を作り、日本に帰りたくないと言うなどアメリカ生活を楽しんでくれことに感謝しております。また子供たちは当時1歳と3歳であったため、渡米時は海外に行くことがよくわかっていませんでしたが、アメリカ生活を堪能し、保育園も喜んで通っていたので良かったです。また、英語の発音に関しては私や妻よりも子供たちの方が非常に上手であり、小さいうちに英語に触れることができたのは貴重な経験であったと考えております。

海外での生活に関しては英語でのコミュニケーションや文化の違いが大変であり、ソーシャルセキュリティナンバーの取得に通常1-2週間のところが2か月半かかるなど苦労した面もありました。物価も当時1ドル約150

円程度と円安の影響もあり、外食はあまりせず、つつましい生活を1年間していましたが、比較的日本の調味料や食材もアジアスーパー等で調達ができ、問題なく食生活が送れたことは良かったです。つつましい生活の中でもスポーツ観戦、ワシントンDC、ニューヨーク、ディズニーワールドに家族で行ったことや、学会でボストン (ISAKOS) やロサンゼルス (ORS) に行けたことはいい思い出になりました (写真1、2)。



写真1: フロリダディズニーワールド



写真2: ボストンでの飲み会

また、住んでいたアパートには日本人家族が他に10世帯以上住んでおり、妻が周りの日本人とコミュニケーションをとれ、様々な情報が入ったり、妻にも話す相手がいて寂しい思いをせずに生活できたことは大きかったかと思います。また、留学中に妻が妊娠し、出産までできたことも良い経験になりました。当初は出産に関する医療保険に加入していなかったことから色々調べ、最終的にメディケイドに加入でき、ほぼ無料で出産できたことはアメリカの医療制度に非常に感謝しております。

5. 海外留学を考えておられる方にアドバイスを

日本での常識とアメリカの常識で違うことが多いことは非常におもしろくいい経験になりました。少しでも興味がある方は海外に行って、日本との文化の違いを経験していただきたいと思います。英語力や海外での生活に不安がある方もいると思いますが行けばどうにかなるのでぜひ機会を作って行っていただければと思います。

6. ピッツバーグ大学で経験したこと

ピッツバーグ大学では同時期に神戸大学整形外科から2名(抽冬晃司先生、山本哲也先生)、名古屋市立大学整形外科から1名(井上淳平先生)がDr. Musahlの元に留学しており、大変お世話になり、感謝しております。(写真3)

Dr. Musahlの元にはアメフトのピッツバーグスティールーズや野球のピッツバーグパイレーツをはじめ、多くのスポーツ選手が来院し、多くのスポーツ症例もあり、見学のみではありませんが、膝の前十字靭帯再建や半月板修復、肩の腱板修復術や関節唇修復術



写真3: 左から順に抽冬晃司先生、井上淳平先生、Dr. Musahl、私、山本哲也先生

なども含めて見学し、多くのことを学ぶことができました。週に1回のACLミーティングでは発表の予演会や論文の抄読会をさせて頂いたり、他の日本人フェローや海外フェローの研究の進捗具合や学会発表の予演会を

聞いて勉強させていただきました。神戸大学の先生方も所属しているBiodynamics laboratoryでは主に様々な動作を透視で撮像し、さらにCT画像を組み合わせでの動作解析を多く行っておりますが、私は膝の解剖に関する研究を行い、週1回のラボミーティングでは研究の途中経過の発表をさせていただき、1年という短い期間で論文を1本acceptできたことはラボのボスであるDr. Anderstやラボのエンジニアのおかげであり、非常に感謝しております(写真4)。

また名古屋市立大学の先生方も所属しているOrhopaedic Robotics laboratoryでは主にキャダバーを用いた動作解析などの研究をおこなっていますが、このラボでは屍体膝の解剖の手伝いやラボミーティングに参加させていただき、様々な経験をすることができました(写真5)。

最後になりますが今回の海外留学を通じて仕事ではアメリカでの研究意欲の高さを学べ、プライベートでは多くの文化の違いを体験でき、家族との時間を多くとれ、一生に一度の貴重な経験をできたことは改めて留学に行けて良かったと考えております。

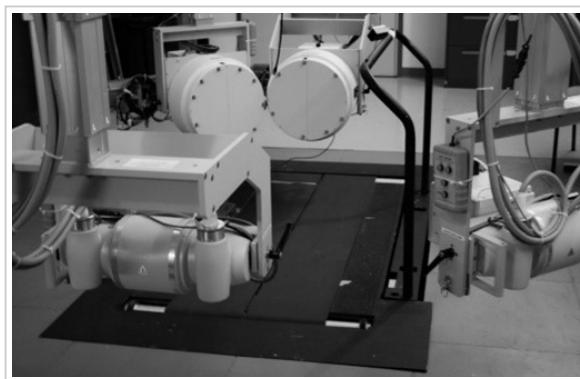


写真4: Biodynamics laboratoryにあるBiplane radiography system (Bertec's dual-belt instrumented treadmill, Vicon Motion Capture System) トレッドミルの上を歩行するなどの動作を透視2台で撮像可能な装置



写真5: Orhopaedic Robotics laboratoryにあるMulti-DOF Joint Tester Robot (Technology Service Ltd. Model FRS2010)

札幌医科大学 水島 衣美

Buongiorno tutti! 肩学会の皆様、こんにちは。札幌医科大学整形外科の水島衣美と申します。2023年4月よりイタリア、ボローニャにあるIstituto Ortopedico RizzoliのBST Labに留学しております。こちらは高井病院の楠崎克之先生と秋田大学の土江博之先生を通してご紹介いただきました。Prof. Nicola Baldiniのもと酸性環境下で変化した骨肉腫の代謝、特に脂質代謝などの研究が盛んに行われており、私は脂質代謝の代謝産物と血管新生に関する研究をしています。日本肩関節学会ニュースレターで骨肉腫の基礎研究という違う分野での留学報告をさせていただくのは大変恐縮なのですが、せっかくのこのような機会を頂きましたので、留学に至った経緯やイタリアでの生活をお伝えできればと思います。

私は札幌医大出身で学生時代は岡村健司先生、廣瀬聡明先生にお世話になりました。2010年に札幌医大整形外科に入局。大学、地方病院での勤務を経て、入局5年目に肩関節外科医を目指すことに決めました。しかし志した翌年、なんとなく流れにのって大学院入学。研究は同大学の病理学第一講座にお世話になり、そこは腫瘍免疫を主とする研究室でした。私自身も骨肉腫の細胞株を用いた研究を行うもなかなか結果は出ず、3年目のぎりぎりのところで卒業にこぎつけました。その後は、堀籠圭子先生の下で1年間、肩関節鏡手術を中心に経験を積んだ後、函館で肩関節疾患を中心に診療に携わり、昨年より留学という経緯になります。

海外留学は中学時代に家庭科の先生がお話して下さったイギリス留学の話聞いた時からずっと憧れがあり、

いつか留学したいと思っていました。しかし流れで大学院に行っているぐらいですから、実現まではほど遠く、病院勤務をするうち留学へのモチベーションが下がったり、そのうちコロナになったりと先延ばしになっていました。

そんな中、秋田大学とのミーティングで土江先生からイタリア留学の話を聞く機会がありました（秋田大学とは共同研究等でお世話になっています）。楽しそうに話されていたのがとても印象的で、また、とてもワイルドになって帰ってこられたように見えました。今にして思えば、それは留学の苦労話で、ワイルドさも髭による演出が大きかったと思いますが、留学するならヨーロッパがいいと長年思っていたのでイタリア留学を考えるようになりました。最終的にはコロナ明けで研究していた時期から数年経ての留学となり、今更大丈夫だろうかと不安が大きかったのも事実ですが、諸先輩に相談させていただき、チャンスがあるなら行ってみようと決断に至りました。

イタリア留学前の最初の難関はビザでした。ここ最近、留学された先生の中で研究用のビザが取れた人はおられず、語学留学用のビザを取得されていました。実際、語学学校に授業料を払い、授業をサボって病院に行くという生活です。取得が難しい理由は、イタリアの施設側でやってもらう手順が抜けていることに由来するのですが、イタリアでは各システムが複雑で、現地でも誰も正確に把握していないので、日本でその情報を得ることは困難となります。また原因がわかった後でも、急にラボの担当者と連絡が取れなくなるといったことがあります。結局は私も語学留学用のビザを取得し渡航することとなりました。語学学校の費用はかかりましたが、せっかくなら同僚とイタリア語で会話できるようになりたいというのもあったので好都合でした。このビザ取得までの一連の出来事はイタリアでは正常の状態で、いろんなことが未解決のまま前に進む、そして最後にはなんとかなるというのがイタリアです。

イタリアでの日々の生活

先月までは、毎日語学学校にも行っていました。授業は90分2コマで半日あるため、半日学校に行き、半日ラボに行き、夜は宿題をやる（あるいは力尽きる）といった生活でした。イタリア語はほぼゼロの状態に来てしまったので、宿題をやらないと翌日の授業に本当についていけず、授業で何をやっているのか全く分からなかった週もありました。授業が進み、レベルがあがってくると、政治、アート、教育など様々なテーマでディスカッションする機会がありました。各国から来ている生徒たちの話を聞いたり、自分の意見を述べたりという中で、イタリアのみならず色々な国の文化を知ることができ良かったです。日本での生活では、病院外で様々な人と話すということはできていなかったのが、本当にいい機会だったと思っています。

一方、ラボは教授をはじめとするスタッフから、卒業論文を目標とする学生までおり、年代は様々ですが全員イタリア人です（写真1）。ラボ内の会話は基本的にはイタリア語になりますが、私とは英語とイタリア語の両方でコミュニケーションをとる形になります。

近年、イタリアでも“Cervello in fuga”（頭脳流出、直訳で脳は逃走中）と呼ばれる現象が問題になっています。優秀な人材が、より良い環境を求めて他国に流出してしまう現象で、イタリアからの流出先としてはドイツ、イギリス等が代表的です。私がいた1年間でも、こちらのラボからもドイツ、オーストリアへと実際に旅立っていました。対策として、若手研究者たちの給与の引き上げがなされたのですが、その結果、若手と経験者の所得の逆転現象が起き、経験ある人々はまた別のストレスを抱えることになり・・・、というように何かと突っ込みどころ満載なのがイタリアです。

その他、イタリア病院事情としては、一般的なことしかお伝えできません。Istituto Ortopedico Rizzoliはボローニャ大学に関連した歴史のある整形外科施設で、一般整形外科に加え、肉腫の診療に関してもイタリア国内のみならず有名です（写真2）。残念ながらイタリアは南北での経済格差が大きく、それは医療の質においても同様ですが、ボローニャはルネサンス頃にローマ教皇領だったこともあり歴史的にも裕福な地域であり、それらが医療の充実に貢献したのではと思考しております。



写真1: ラボのメンバーで丘へハイキング



写真2: 病院では昔の診察風景の写真が展示されている。リハビリ室の風景

さて、ボローニャは日本では比較的情報が少ないかと思いますが、ボローニャの街を説明する3つの言葉(la dotta, la grassa, la rossa)がありますので、こちらに沿ってご紹介いたします。La dotta (学問の街) は、諸説あるものの、ボローニャ大学はヨーロッパ最古の総合大学とされ、現在も10万人近くの学生が在籍しています。かつてはダンテ (イタリア語の父と呼ばれる)、コペルニクス (地動説を提唱) が在籍していました。

La grassa (食の街) は、かねてから美食の街として知られ、多くの観光客が訪れます。いわゆるボローネーゼは、本来はTagliatelle al ragu (タリアテッレアルラゲー) と呼ばれ、太麺のパスタTagliatelleに肉raguのソースを絡めたものです (写真3)。他にもラザーニャ、トルッテローニ、トルッテリーニなどパスタだけでも数種類 (写真4、5)、そしてプロシュートを始めとする生ハム、パルミジャーノ・レッジャーノ (写真6) など美味しいものには事欠きません。



写真3: タリアテッレ パルミジャーノをたっぷりかけて召し上がれ!



写真4: トルッテローニ 中にチーズ等が入っている



写真5: トルッテリーニ 熱々のスープと食べる



写真6: プロシュート、モルタデッラなどハムとチーズ各種

La rossa (赤い街) は中世の街並みが残し、赤いレンガで作られた建物によって赤く見えることによります。

このようにボローニャは学生や観光客が多く賑やかなので、夜の外出も危険なことはほぼありません。とはいえ、もちろん最低限の注意は必要で、語学学校の日本人が財布を盗まれるという事件もありました。また余談ですが、私自身もアイルランドでパスポートを紛失しました。ダブリンの学会に来ていた先輩・後輩に会いに行き、久々に会えた嬉しさで浮かれていた間に盗まれたと思われます(写真7)。当たり前ですが、パスポートがないと他国への移動は不可能となるため、再発行されるまでダブリン滞在となってしまいました。アイルランドでの冒険についてもう少し語りたいところですが、パスポートを失ってもダブリンは魅力的でした、とまとめさせていただきたいと思います。

海外留学を考えておられる方へ

留学前は、このタイミングで留学し覚悟のないまま行って大丈夫だろうか、かなり迷いがありました(その際、相談に乗っていただいた先生には感謝してもしきれません)。現在も何かをアドバイスできる状態では決してありませんが、ただ言えることは、留学に興味があるなら行ってみるべきだと思います。日本を出てみないとわからないことやそこでしか出会えない人はたくさんいるので、飛び出してみるべきです。上手くいかなかったとしても、貯金が減ったり、1年経ってもそんなに喋れないなとか思ったりするだけで、死ぬわけではありません。自分の目で直接みて、世界の広さや美しさを知ることは大事なことです。



写真7: ギネスビール博物館(左2番目; 土江先生、1番右; 筆者) この時はすでに盗まれていると思われるが気づいていない

山形県立保健医療大学大学院 理学療法士 星川 恭賛

1. 自己紹介

山形県立保健医療大学大学院、理学療法士の星川恭賛と申します。2021年に山形県立保健医療大学保健医療学部理学療法学科を卒業後、卒業研究で行った肩胛板筋群についての研究をきっかけに肩関節に興味を持ち、同年同大学大学院の博士前期課程にフルタイム大学院生として入学しました。大学院では指導教官の村成幸先生のご指導の下、肩関節に関する基礎および臨床研究を行ってきました。博士前期課程は2022

年修了し、同年から現在にかけては同大学院の博士後期課程に在籍しています。また、2022年からは日本学術振興会特別研究員DC1としてテキサス大学サンアントニオ校医工学部の Hugo Giambini 先生の研究室へ留学し、肩関節のバイオメカニクスについての研究を続けています。

2. 海外留学を行うことになったいきさつは何ですか。

海外留学に憧れ始めたきっかけは、私が学部生の頃（2019年）、Giambini先生の研究室へ留学されていた同大学院OBの由利拓真先生（現京都橘大学）の存在でした。由利先生には留学前からアドバイザーとしてご教示いただいております、留学が決まった時の由利先生の姿をみて、私もそうなれたらいいなという思いが芽生えました。本格的に留学を目指したきっかけは、2020年にフェニックスで開催されたORSでした。当時、私は学部生で、前指導教官の清重佳郎先生の勧めで卒業研究テーマをORSへ投稿する機会をいただき、幸いにもアクセプトされ、初めて国際学会へ参加することになりました。初めての国際学会は私にとって刺激の連続で、学会規模の大きさと英語で円滑にディスカッションしている先生方の姿をみて、世界で研究したいと思いました。由利先生の紹介で学会会場に来ていたGiambini先生とも初めてお会いでき、ここしかないと思い、拙い英語で自分が行ってきた研究テーマのプレゼンと将来留学したい意思をその場で伝えました。Giambini先生はとても親身に聞いてくださり、留学のための2つのプランをご教示くださいました。プラン1は留学時の生活資金を自分で調達してからリサーチフェローとして留学する。プラン2はテキサス大学のPh.D.プログラムに直接アプライするプランでした。私はまずプラン1を選択し、大学院へ進学後、博士前期課程では指導教官の村先生からご指導をいただきながら日本学術振興会特別研究員DC1（学振）の獲得を目指しました。その結果、2021年9月に採用が決定し、Giambini先生も快く留学を引き入れてくださったため、2022年8月からテキサス大学へ留学させていただく運びとなりました。学振の獲得へ至る道のりは、右も左も分からなかった私を正しい方向へ導いてくださった先生方のサポート無しでは辿り着けませんでした。このような恵まれた環境下で学部、大学院生活を送っていたことが私にとって一番の海外留学へのきっかけだったと思います。この場を借りてご指導いただいた前指導教官の清重先生、現指導教官の村先生、アドバイザーの由利先生、山形県立保健医療大学関係者に感謝申し上げます。

3. 海外での留学や生活について不安だったことがありますか。そしてその不安について今はどう感じておられますか。

不安だった点はまず英語でのコミュニケーションでした。英語学習は留学する2年前から週5日15分オンライン英会話をやると決めて取り組んではいました（サボってしまった時もありました）が、実際現地での会話はテンポが速く、最初は会話に入れず、苦しい思いと自分の勉強不足を反省しました。特に、最初のラボミーティングでは、他のラボメンバーがスムーズにプレゼン、ディスカッションをする中で、私はなかなか自分の意見を伝えられず、Giambini先生とラボメンバーが険しい顔になりながらも必死に意図を汲み取ろうとしてくださったことは今でも覚えており、大変苦勞をかけたと思います。それでもラボメンバーはいつも快く私の相談に乗ってくださり、彼らのサポートを得ながら平日は研究、週末は一緒に遊びに出かける中で、会話のテンポ感や会話独自の表現や言い回しを学んでいくことができました。これは現地でのコミュニケーションを通じてしか得られなかったものだと思います。プレゼンの面では、私と同じようにリサーチフェローとして留学していた学生のシンプルな表現かつ簡潔な文章で発表している姿

をみて、そのやり方を真似していったことで、次第にGiambini先生とラボメンバーの顔が陰しくなる時は減りました。もちろんまだ会話についていけない時はあります。。。また、留学時期が円安時期と重なっていたため、生活資金も不安な点でした。学振から支給される生活資金20万円のうち、家賃で半分は消費したため、残りの資金でギリギリの生活を送っていました。テキサスの家賃・物価は他の州よりも安価であったことが救いで、他の州であれば生活はできていなかったと思います（笑）

4. これから海外留学を考えておられる方へのアドバイス

20代で海外留学を経験できたことは、とても大きな財産となりました。1つ目は海外の研究者と共に英語での研究生活を送れたことで、今後国を跨いで共同研究する選択肢が増えたことです。2つ目は国際学会での発表で、だんだんとディスカッションができるようになり、発表を行う意義が大きくなったことです。3つ目は留學生活の中で米国はもちろん様々な国の友人ができ、コミュニティが大きく広がったことです。留學前にはいなかった海外の友人ができたことは、言語の面はもちろん、今まで知らなかったその国の文化や情勢を学ぶきっかけにもなりました。私は単身での留學だったため、特にルームメイトやラボメンバーとは言語面から精神面においてもお互いに支え合う仲となり、一生の友人になりました。留學して一番感じたことは、想像以上に海外からのインターナショナルスチューデントやリサーチフェローなどの留學生は多く、留學生に対しての理解があり、お互いに助け合って研究・生活している環境があるということでした。最初は怯えながらの海外留學への一歩でしたが、今では自信をもってその一歩を踏んで良かったと思っています。拙い文章で恐縮ですが、私の経験が皆様の海外留學挑戦への一歩を後押しできると幸いです。

5. 研究室・テキサス州サンアントニオの紹介

私が留學したHugo Giambini先生の研究室 (Musculoskeletal & Orthopedic Biomechanics Laboratory) では、肩関節のバイオメカニクス研究、画像解析研究、分子生物学研究が行われており、MicroScribe、Material Testing System、3D Digital Image Correlation System、Shear Wave Elastographyなど最新鋭の研究設備も整っています。隣接するUT Healthの肩関節チームとも共同研究が行われています。私は主にCadaverを用いたバイオメカニクス研究を行っており、肩腱板筋亜区画の関節安定性への寄与をテーマに研究を続けています。



写真1：研究室

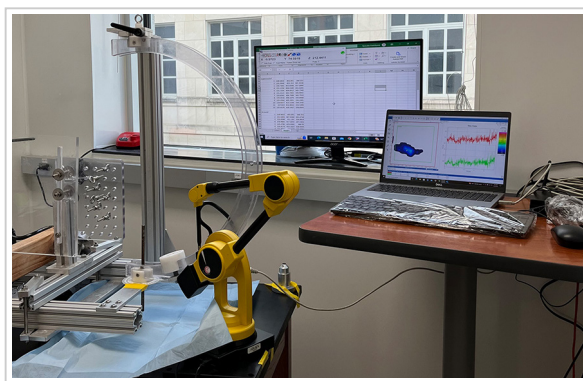


写真2：Cadaver 実験室

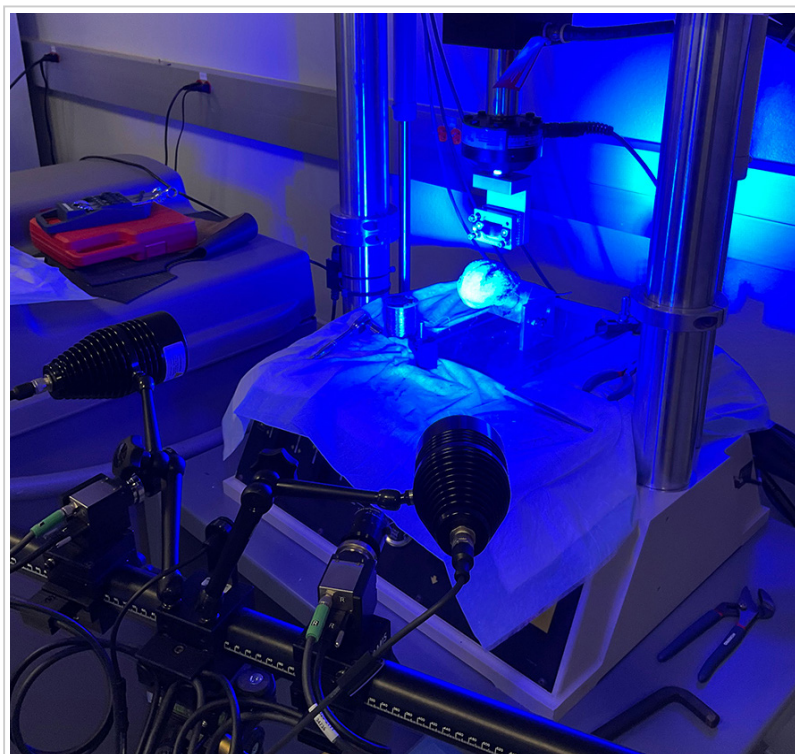


写真3: Material Testing Systemと3D Digital Image Correlation Systemを用いたCadaver 実験風景

大学のあるサンアントニオは、テキサス州の南部に位置し、テキサスとメキシコ文化が混ざりあった地域です。現地の人々はとても陽気で明るく、留学中は彼らの人柄と笑顔に救われた時が多々ありました。

テキサスは他の州と比較して物価も安く、非常に生活しやすい環境です。また、綺麗な町並みのリバーサイドウォーク、「Remember The Alamo!」で有名なアラモの砦、今NBAで話題のVictor Wembanyamaが活躍するサンアントニオ・スパーズ本拠地、日本のBBQとはまた異なるテキサスBBQなど見所も盛り沢山です。



写真4: ラボメンバー写真 (右1番目: Giambini先生、左1番目: 本人)

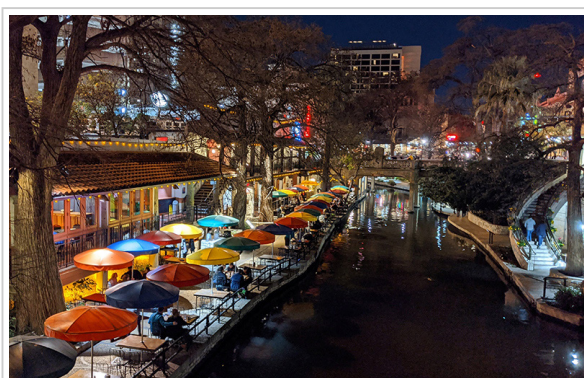


写真5: サンアントニオのダウントOWN (リバーサイドウォーク)



写真6: アラモの砦

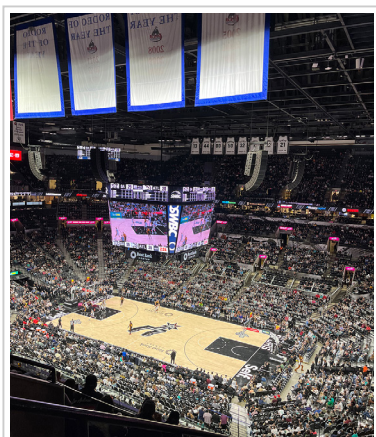


写真7: NBA (サンアントニオ・スパーズ)
観戦



写真8: 大学アメフト試合観戦



写真9: テキサスBBQ

末筆ではございますが、この度の海外留学記に寄稿する機会をいただきました広報委員会委員長の夏恒治先生をはじめ広報委員の皆様に感謝申し上げます。

各委員会報告

雑誌「肩関節」編集委員会

担当理事 北村 歳男 委員長 佐野 博高

雑誌「肩関節」編集委員会では、現在第48巻の発刊に向けて作業を進めています。第48巻には合計138編（昨年は135編）のご投稿を頂いており、内訳は、学術論文 102編、原著・総説 1編、症例報告 8編、proceeding 27編でした。この場を借りて、ご投稿下さった会員の先生方、査読にご協力いただいた代議員、査読委員の先生方に、改めて深く御礼申し上げます。

3月21日と4月8日には、2日に亘ってweb編集会議を開催し、初回査読において少なくとも1名の査読者がrejectすべきと判定した論文、原著論文として投稿された論文、術後経過観察期間が1年に満たない論文、審査の過程において担当委員が要検討と認めた論文等について、委員全員で厳正な審議を行いました。著者の先生方におかれましても、senior authorと十分ご相談いただいた上で、回答書や修正論文をご準備くださいますようお願いいたします。

また、昨年の学会時に、雑誌「肩関節」の掲載論文のPDFファイルには保護がかけられており、ダウンロードしても、ファイル上にマーカーを引いたりコメントを書き込んだりすることができず、不便である、というご意見をいただきました。これを受けて、当委員会では、現在会員の先生方の利便性を高めるべく、公開するPDFファイルの形式について見直し作業を進めています。会員の先生方には、本誌についてその他にもお気づきの点がありましたら、事務局までご意見をお寄せいただければ幸いです。

最後に、雑誌「肩関節」委員会では、投稿規定やチェック表を随時改訂しています。本誌に論文を投稿される際には、必ず日本肩関節学会のHP (<http://www.j-shoulder-s.jp/entryrule/index.html>) で、最新の情報をご確認下さるようお願いいたします。

国際委員会

担当理事 森原 徹 委員長 三幡 輝久

トラベリングフェローの派遣と受け入れについてご報告させていただきます。

トラベリングフェローの派遣

2024年4月2日にZoom面談によりASES（アメリカ肩肘学会）トラベリングフェローの選考を行いました。その結果、千葉大学の落合信靖先生と奈良県立医科大学の井上和也先生が選出され、今秋にアメリカの著名な先生方の施設を訪問していただきます。

SECEC（ヨーロッパ肩肘学会）トラベリングフェローとして、福井総合病院の山門浩太郎先生が選出されていますので、今秋にヨーロッパを訪問していただく予定です。現在は訪問先の選定をしていただいています。

トラベリングフェローの受け入れ

ASES（アメリカ肩肘学会）からトラベリングフェローが来日されます。9月16日から23日までという短期間であり移動時間があまり取れないため、今回は大阪、京都、東京、仙台を訪問していただきます。

KSES（韓国肩肘学会）からトラベリングフェローが来日されます。10月7日から11月2日まで東京、九州（鹿児島、熊本、福岡）、関西（大阪、京都、名古屋）、北海道、仙台を訪問していただく予定です。

各地区の担当の先生方には、トラベリングフェローのお世話をお願いすることになりますが、よろしくお願い申し上げます。

トラベリングフェローの募集

現在はKSESへのトラベリングフェローの募集を行っており、締め切りは2024年8月31日です。皆様のご応募をお待ちしております。

高岸直人賞決定委員会

担当理事 伊崎 輝昌 委員長 船越 忠直

高岸直人賞決定委員会は、1987年より開始された『高岸直人賞』、2012年より開始された『ベストアブストラクト』、2022年より開始された『国際論文奨励賞』の選考を行なっています。

『高岸直人賞』は優秀な若手肩関節外科医による学術論文に対する奨励賞であり、これまで数多くの著名な先生方が受賞されております。『ベストアブストラクト』は毎年開催される学術集会のアブストラクトの中から選出され、本学会の公式英文機関紙であるJournal of Shoulder and Elbow Surgery誌に掲載されます。

『国際論文奨励賞』は、第47回日本肩関節学会学術集会会長末永直樹先生の基金を元に、日本から世界へ情報発信するため、本学会の公式英文機関紙であるJournal of shoulder and elbow surgery誌等への投稿を奨励するために設立されました。

会員の皆様にはぜひ積極的に応募して頂くようお願い申し上げます。

高岸直人賞の対象論文は以下の通りです。

1. 当該年度の12月31日時点で満45歳以下の会員の発表論文であること、
2. 候補論文は当該年度の日本肩関節学会での発表論文であること、
3. 対象論文はUpdateで魅力的で素晴らしい論文であること、
4. 高岸直人賞の審査対象論文は肩関節学会抄録集から選ばれてノミネートされた論文の中から、Full paperが期限内に提出された論文とする、
5. 審査の対象となる論文は日本語、英文のいずれでも可とする、
6. 上記の条件が満たされた論文は雑誌「肩関節」、JSES 以外の雑誌に投稿しても可とする、
7. 審査対象はノミネートされた論文の Full paper ですすでに Publish されたものは含まない

国際論文奨励賞については以下の通りです。

国際論文奨励賞設立趣旨

本賞は、日本から世界に情報発信するという第47回日本肩関節学会（末永直樹会長）のテーマを継承するため、日本肩関節学会の公式英文雑誌（Journal of Shoulder and Elbow Surgery等）への投稿を奨励することを目的とする。掲載論文数に応じた奨励金を贈呈する。

募集要項

(1) 応募要件

国際論文奨励賞に応募できるのは、一般社団法人日本肩関節学会正会員または準会員1号であり、以下の条件をすべて満たす者とする

1. 1年間(8月1日より翌7月31日迄)で下記雑誌に3編以上掲載(アクセプトまたは掲載された日付を有効とする)されていること
2. 対象となる雑誌は以下のとおりとする。ただし、対象論文のうち少なくとも1編はJSESに掲載されていること
 - JSES(Journal of Shoulder and Elbow Surgery)
 - JSES International
 - Seminars in Arthroplasty: JSES
 - JSES Reviews, Reports & Techniques
3. 会員在籍期間に論文がアクセプトされていること
4. 本賞の採否決定まで継続して会員資格を有すること
5. 肩に関する原著論文であること(症例報告、Reviewは対象としない)
6. 応募者は筆頭著者であること
7. Corresponding author は日本国内施設に在籍していること
8. 肩関節学会学術集会での発表の有無は問わない

(2) 奨励賞の額

論文3編20万円、論文4編30万円、論文5編以上50万円

(3) 募集期間

8月1日～翌年7月31日

(4) 応募方法

応募フォーム (<https://business.form-mailer.jp/fms/e0148224155840>) に対象論文（アクセプト日及び掲載日のわかるもの）を添付し、事務局へ送信する

(5) 選考方法

高岸直人賞決定委員会で審査決定する。再受賞はこれを妨げない

(6) 表彰

日本肩関節学会学術集会で理事長が表彰する

(7) その他

初年度の掲載対象期間は2021年8月1日より2022年7月31日までとする

募集要項は2年ごとに見直す

※海外で行われた研究に関しては、「日本から世界に発信する」という趣旨に合致するか、委員会にて審議する

問い合わせ先 事務局／E-mail: office@shoulder-s.jp

社会保険等委員会

担当理事 高瀬 勝己 委員長 望月 智之

2024年度の診療報酬改定が施行され、日本肩関節学会から要望した3つの新規術式 ①肩甲骨烏口突起移行術 27,380点 ②関節鏡下肩関節唇形成術（関節鏡下肩甲骨烏口突起移行術を伴うもの）46,370点 ③ 関節鏡下肩関節授動術（関節鏡下肩腱板断裂手術を伴うもの）54,810点 とすべてにおいて診療報酬を認めていただくことが出来ました。会員の先生方のご協力（肩の手術アンケート）の賜物だと考えております。

上記術式の診療報酬の請求にあたり留意点がございます。上記術式は4年に1度行っております肩手術アンケートにおける手術件数、手術時間などをエビデンスとして提出して厚労省のヒアリングを受けております。②の関節鏡下肩関節唇形成術（関節鏡下肩甲骨烏口突起移行術を伴うもの）は烏口突起移行も関節唇形成も関節鏡下に行ったものに限られます。③の関節鏡下肩関節授動術（関節鏡下肩腱板断裂手術を伴うもの）は強い拘縮を伴う腱板断裂症例に対して、関節鏡下に関節包の全周切離を行い、腱板修復を行った症例に限られます。2021年度の肩手術アンケートで報告された関節鏡下腱板修復術が8504例で、その中で関節鏡下関節授動（関節包切離）術が併用されているのは809例と1割弱に過ぎません。これらのデータをもとに厚労省に保険収載を要望しています。不適切な保険申請は日本肩関節学会の信頼を損ないますので、適切な術式選択と診療報酬の申請をお願いいたします。不適切に過剰な申請を行った施設に対しては、監査等が入る可能性もありますのでご留意下さい。

社会保険等委員会はまたすぐに2年後（2026年）の新規収載術式の検討を行ってまいります。本年2024年

9月30日には要望を提出する必要がありますので、急いで準備を進める次第です。次回の肩手術アンケートは2025年1月1日から2025年12月31日までの症例を2026年3月頃に集計する予定であります。引き続き会員の先生方におきましては、社会保険等委員会の活動のご協力を賜りたくお願い申し上げます。

教育研修委員会

担当理事 菊川 和彦 委員長 後藤 英之

教育研修委員の2024年度の活動予定について報告致します。

第16回教育研修会については、第51回日本肩関節学会開催期間中の2024年10月26日に開催予定です。内容は来年度と合わせて一連の「肩関節疾患の診断・治療」について研修できるようプログラムを作成しています。

第16回 教育研修会 会場：国立京都国際会館

日程：2024年10月26日（土）予定

教育研修講演1 座長：菊川和彦

演題1：肩の診察・画像診断

演者：東北大学 整形外科 山本宣幸

演題2：肩の機能解剖・バイオメカニクス

演者：至学館大学 健康スポーツ科学科 後藤英之

教育研修講演2 座長：後藤英之

演題1：肩関節周囲炎の診断と治療

演者：八王子スポーツ整形外科 小林尚史

演題2：腱板断裂の診断と治療

演者：名鉄病院 整形外科 土屋篤志

また、第8回日本肩関節学会キャダバーワークショップ、第8回日本肩関節学会手術手技フォーラムも開催を予定します。毎年多数のご応募を頂いておりますが、参加募集は7月頃から開始予定です。会員の資格があればどなたでも参加可能ですのでぜひご応募下さい。

第8回 日本肩関節学会キャダバーワークショップ

日時：2024年11月23日（土）～24日（日）＜2日間＞

会場：名古屋市立大学先端医療技術イノベーションセンター

募集人数：12名（予定）

研修コース：①関節鏡コース ②直視下手術人工関節コース 計6テーブル

講師：専任講師6名（予定）

第8回 肩関節疾患手術手技フォーラム

日時：2024年11月23日(土) 17:00～(予定)

会場：名古屋市立大学医学部研究棟 会議室 (予定)

【プログラム】

関節鏡視下腱板修復術 –最近のトピックスを含めて–

関節鏡視下バンカート修復術 –コンタクトスポーツへの対処法も含め–

解剖学的人工肩関節置換術

リバース人工肩関節置換術 合併症の予防を含めて

製品紹介・企業広告

教育研修委員会では、これからも皆様のお役に立てるよう活動して参ります。今後ともご指導、ご意見を賜りますようお願い致します。

学術委員会

担当理事 高瀬 勝己 委員長 藤井 康成

学術委員会の活動報告としては、現在腱板の脂肪変性評価に関して、従来から用いられているMRI矢状断肩甲棘最外側面におけるGoutallier分類の信頼性に関して、日本の肩関節外科医を対象に調査を行なっております。

諸家の報告では、検者内、検者間での信頼性に関して、やや検者間で信頼性が劣る傾向はあるものの、その使用に対して特に問題点は指摘されておきませんが、日本におけるMRIによるGoutallier分類評価の信頼性に関する現状を調査すべく、まずは学術委員会委員を対象とし、トライアルを2回行い、解析を行なっている段階です。

本トライアルの結果につきましては、今年度あるいは次年度の日本肩関節学会におきまして、経過報告を行う予定であります。

現時点では、まだ棘上筋のみを対象としておりますが、腱板脂肪変性評価における基準と条件をより明確化して、Goutallier分類による定性評価を、MRI上での定量評価結果に少しでも近づき整合性を高められればと希望しております。

また、対象を棘上筋から、棘下筋、肩甲下筋、小円筋へと広げることで、腱板脂肪変性の評価情報量を増やすことにより、術式選択、術後成績、再断裂への影響をより鮮明化できればと期待しております。

肩関節学会員を対象としました広範囲腱板断裂に対する手術療法に関するアンケート調査につきましては、昨年の肩関節学会にて結果報告を行い、雑誌肩関節に投稿し掲載予定であります。また、本news letter内にも調査結果のサマリーを掲載させていただきました。

新しい企画としては、肩甲骨関節窩OCDのアンケート調査を、学会員全員を対象としまして、本年度中に行う予定であります。実施の際は、何卒ご協力いただきますよう宜しくお願い申し上げます。

日本整形外科学会学術集会からのシンポジウム案の作成依頼があり、理事会での承認の元、以下の結果を学会事務局に送付しました。

2024年 基礎学術集会 (採用)

基礎研究から検討した腱板修復に与える影響

2025年 学術総会（採用は未定）

腱板一次修復不能例に対する関節温存した術式選択とその限界

凍結肩の病態と治療戦略

ここ数年の代議員数の増員により、学術委員会のメンバーもかなり刷新され、総勢20名近い構成となりました。委員長としては、力不足のため、調査企画や議事の進行など取りまとめに難渋しておりますが、パワーアップした学術委員会として、少しでも興味ある調査を発案し実行できますよう、委員会一丸となって邁進しく所存であります。

今後とも学術委員会活動に対しまして、会員の皆様の益々のご厚情ならびにご協力を賜りますよう、宜しくお願い申し上げます。

広報委員会

担当理事 田中 栄 委員長 夏 恒治

広報委員会は長らく業務に携わっていただいた望月由先生、新井隆三先生が委員会から去られ、新たに植木博子先生、橋本瑛子先生、原田洋平先生の3人の新メンバーをお迎えしました。新たな力と共に新たな試みに取り組んでいこうと考えています。

まずホームページに関してですが、長らくお待たせしていましたが2024年3月末から新ホームページが公開され、会員ページも新しくなりました。すでにいくつかのご指摘やご要望も伺っています。貴重なご意見ありがとうございます。ホームページに関連した今年度の業務としては日本肩の運動機能研究会のホームページの更新、医療従事者以外の一般の方に向けたホームページの作成、広告バナーの作成などを手がけて行く予定です。

ニュースレターは今号で22号になります。今回は学術委員会からもご寄稿いただきました。ありがとうございます。今後も引き続き年2回（1月、6月）のニュースレター発刊を行っていきますが、会員のみなさまからこういう記事が欲しい、こういう記事を書きたい等のご要望があればいつでもお知らせください。

財務委員会

担当理事 伊崎 輝昌 委員長 酒井 忠博

財務委員会は担当理事の橋口 宏先生が退任されることになり、伊崎輝昌先生が担当理事に就任されました。引き続き経験豊富な委員の皆様のお力をお借りして、出来る限り財務の改善に尽くしたいと存じます。

2022年度の財務報告としては準会員1号及び2号の入会が堅調に推移した事、前年度の未納者の入金実績が良好であったことにより増収となりました。しかし2022年に入ってから急激な円安、物価高の進行により、印刷費などの諸費用の増加に加え、JSES購読料の支払額が大幅に増加したため、-106,222円の収支となりました。決して大きな額ではありませんが、赤字であることには変わりなく、長期的な観点から見ると財務の悪化が懸念されます。昨年もお示しましたように、正会員、準会員1号の年会費15,000円にはJSESオンライン購読料が含まれており、円安による差額により来年度の予算ではJSESオンライン購読料が255万円程度の増額となっております。（2024年4月時点での情報では、今井晋二先生のご尽力のお陰で1ドル120円での支払いとなったとのこと。）

社員総会においても、今後このような円安が長期化すれば、新規事業に充てる予算捻出のために年会費値上げを考慮せざるを得なくなるという懸念をもっていることを述べさせていただきました。財務委員会としては引き続き、

役員・代議員の各種会議のWeb開催を奨励するなど、経費節減の努力をして参りますので、会員の皆様方におかれましては引き続き御理解、御協力を御願いますと共に、財務改善のため、さらなる会員増加に御協力頂けますよう、よろしくお願い申し上げます。

リバース型人工肩関節運用委員会

担当理事 菊川 和彦 委員長 山門 浩太郎

RSA運用委員会では、リバース型人工肩関節全置換術適正使用基準（RSAガイドライン）適用についての相談を受け付けています。「判断に迷う場合はRSA運用委員会に相談する」と記載があるとおり、あくまでも相談であり許可の決裁をおこなうわけではありませんが、判断に迷う症例の相談は常に受け付けています。

一般的にガイドラインとは、自主的に遵守することが推奨されるルール（「指針」あるいは「行動規範」）を指す場合と、法令ではないものの最低限満たすべき義務的ルール（より厳格な「指令」あるいは「基準」）を意味する場合があります。RSAガイドラインは前者の自主的ルールになりますが、昨今の医療過誤訴訟において、ガイドラインに従った治療を行うということが医療水準判断の基礎とされる傾向があること、また、ガイドラインとは異なった治療を行った場合には、ガイドラインに従わなかったことについて合理的な理由が説明できるようにしておく必要があること（“Comply or explain principle”）は記憶にとどめておく必要があると考えられます。

具体的な相談手順としては、肩関節学会事務局のoffice@shoulder-s.jpあてに、該当の症例についての症例検討等をおこなう形式のスライド（パワーポイントあるいはPDF）を作成してご送付ください。もしも動画が含まれている場合は、ファイルサイズの制限のため受信が難しいことがありますので、動画があることをメール内にご記載ください。また、ご相談者が該当症例に対してどのような判断を下し、どのような術式を望んでいるかについても記載をお願いしています。事務局に届いた相談案件は、担当理事と委員長で内容を確認のうえ、委員会の先生方に意見をうかがっています。回答期間はおおむね1週間から10日ほどですが、手術の予定日がさしまっているなど特段の事情があれば可能な限り対応しています。また、上腕骨近位端骨折に関連した相談は、原則として日本骨折治療学会に設置されているリバース型人工肩関節運用委員会委員会が窓口となっていますが、骨折遺残変形や陳旧性脱臼などの疾患については、肩関節学会への相談を希望される場合にはお受けしています。一方で、よく誤解されるところとして、年齢要件があります。腱板再断裂症例やリウマチ疾患あるいは人工関節置換術後の再置換例といった非「腱板初回手術」では65歳未満という記載がありませんので、RSAの使用は年齢により一律に排除されるところではありません。RSAガイドラインは複数回にわたって改正改訂が行われており、記載内容について定期的な確認をお願いいたします。

日整会会員専用サイト

<https://www.joa.or.jp/member/topics/2020/files/20200507.pdf>

日本肩の運動機能研究会運営委員会

担当理事 森原 徹 委員長 船越 忠直

日本肩の運動機能研究会（Japanese Society of Shoulder Function Research）は、2003年に第30回日本肩関節学会の高岸憲二会長が『肩フォーラムin 群馬』を同時開催し、2004年の第31回日本肩関節学会の筒井廣明会長が始めて『肩の運動機能研究会』を開催され始まりました。その後参加者数は飛躍的に増

えましたが、会員登録の制度がない、事務局が不在、研究会での発表をデータベースに登録することが不可能、雑誌への投稿ができないなど様々な問題点がありました。そこで、2016年に中川照彦先生、浜田純一郎先生、村木孝行先生を中心とするワーキンググループが発足し、2019年10月に日本肩の運動機能研究会（以下、研究会）として正式に承認され、2023年10月に日本肩の運動機能研究会会則が承認されました。

研究会は独立した団体ではなく日本肩関節学会内の一組織であり、研究会会員は日本肩関節学会会員（正会員、準会員1号、2号）で構成され、日本肩の運動機能研究会運営委員会（以下、運営委員会）により運営され、実務は研究会世話人会が行います。運営委員会では、セラピストが活躍、成長する場を提供すること、研究会が発展し様々な形で学術的業績を報告できる機会を提供することを目標としており、日本肩関節学会理事会、代議員会と綿密に連携し問題点を解決したいと考えております。

さらに、研究会は今後世界のセラピストとも連携します。2023年ローマで開催された国際肩肘学会（ICSSES）に併催された第7回国際肩肘セラピスト学会（ICSET）において、ICSETの開催支援組織として国際肩肘セラピスト学会連合（ICSSSET）が設立されました。日本はICSSSETの4つの設立国として、ヨーロッパ、オーストラリア、アメリカ合衆国と共に今後のICSETを発展させていく義務があります。現在は、研究会世話人会代表世話人の村木孝行先生が日本肩関節学会からの代表であり、今後は運営委員会として世界で活躍するセラピストを応援したいと考えております。

より多くの会員の皆さんに研究会及びICSETで発表して頂けるように邁進して参りますので、何卒よろしくお願い申し上げます。

改めて日本肩の運動機能研究会の世話人の先生方をご紹介します。

代表世話人 村木孝行

副代表世話人 甲斐義浩、

世話人 河上淳一、高村 隆、千葉慎一、三浦雄一郎、宮下浩二、山崎 肇、遊佐 隆、

（新世話人）石川博明、内田智也、宮本 梓

用語委員会

委員長 佐野 博高

用語委員会では、委員会発足時からの課題として、肩関節可動域測定法の改訂作業に取り組んでいます。2024年2月には、椎体番号を用いた肩関節内旋可動域の測定法や、肩関節屈曲90度（いわゆる3rd plane）における内外旋角度の測定法を追加収載し、内転角度の表示・測定法について修正を加えた改訂案を会員の先生方に公開し、広くご意見を募りました。ご意見をお寄せくださった先生方に、この場をお借りして、改めて深く御礼申し上げます。今後は、頂戴したご意見を踏まえて改訂案のブラッシュアップ作業を進め、日本肩関節学会の改定案としてまとめていく予定です。

また、昨年会員の先生方からご応募をいただいた検討対象用語の中から選定した、「五十肩」、「臼蓋」、「サイレント・マニプレーション」の3つの用語についても、小グループに分かれて検討を進めています。このうち、「五十肩」については、2021年に雑誌「肩関節」に全会員を対象とした意識調査の結果が報告されていたことを踏まえて、今回はこの用語に対するその後の意識の変化を明らかにする目的で、役員・名誉会員を対象としたアンケート調査を行いました。今後調査結果をまとめ、学会web siteに公開していく予定です。一方、「臼蓋」、「サイレント・マニプレーション」につきましては、現在文献的調査を進めています。これら2つの用

語については、これまで会員の先生方を対象とした意識調査が実施されたことはありませんので、今後そうした調査も行った上で、学術用語としての位置づけについて検討を進めていく方針です。

当委員会では、会員の皆様の正確な用語使用に資するよう、日本肩関節学会のweb siteやニュースレターなどで、審議内容を適切にフィードバックしていきたいと考えております。会員の先生方におかれましても、当委員会の活動に引き続きご理解・ご協力を賜りますよう、お願いいたします。

選挙管理委員会

担当理事 田崎 篤

2024年度（2024年8月1日～）の活動予定として、代議員選挙、理事選挙および第54回学術集会会長選挙を行います。選挙案内や候補者等の連絡は、随時会員サイトに掲示します。

1. 代議員選挙について

代議員選出規則に基づき、下記の要領で選挙を実施する予定です。

- 2024年6月に公示を行い、7月に公募する予定。
- 2024年8月以降から10月の第51回学術集会までの然るべき時期にwebで信任投票及び必要に応じて選任投票を行う。
- 当選人を第51回学術集会時の社員総会で発表する。

2. 理事選挙について

役員選出規則に基づき、下記の要領で選挙を実施する予定です。

- 2024年4月に公示を行い、6月に公募する予定。
- 2024年8月以降から10月の第51回学術集会までの然るべき時期にwebで信任投票及び必要に応じて選任投票を行う。
- 当選人を第51回学術集会時の社員総会で発表する。

3. 第54回学術集会会長選挙について

学術集会会長選挙規約に基づき、以下の要領で選挙を実施します。

- 2024年6月に公示を行い、7月に公募する予定。
- 2023年8月以降から10月の第51回学術集会までの然るべき時期にwebで投票を行う。
- 第51回学術集会時の社員総会で当選人を決定して、発表する。

50年史編纂委員会

担当理事 菊川 和彦 委員長 国分 毅

日本肩関節学会の50年史作成状況ですが、執筆をご依頼させていただきました先生方からの原稿の校正作業も終了し、委員で分担して行った日本語原稿の英訳もすべて終了しております。この場をお借りして、お忙

しい中ご執筆いただきました諸先生方に御礼申し上げます。また、英訳を行ってもらいました50年史編集委員会の先生方にも深謝いたします。歴史を編纂するにあたりご寄稿いただきました原稿の英訳は、普段我々が書く英語の抄録や論文、また海外の先生方とやり取りする英文メールなどとは異なるタイプの英語で、公的省庁や海外学会などの団体名や医学以外の専門用語の英訳には大変苦労したと思います。最近では、ネット上での翻訳サイトや、AIを活用した翻訳アプリなどもあり、ひと昔前に比べれば大幅に労力を減らすことができるようになったとは言え、かなりの時間を要したものと思われます。今年度から正式に始まった“医師の働き方改革”に逆行する仕事でしたが、各委員からは肩学会の知らなかった歴史を学べてよかったと多くのコメントをもらい、大変有意義な自己研鑽にもなったかと思っております。

今後は、翻訳された英語原稿のnative check、実際の50年史サイト作成作業などに取り掛かります。第51回日本肩関節学会学術集会開催に合わせて公開できるように準備してまいりますので、皆さま楽しみにしてお待ちください。尚、公開後は学会員の皆様より修正すべき点などのご意見も受け付ける予定ですので、何卒よろしくお願い申し上げます。

ホームページリニューアルのお知らせ

広報委員会 美船 泰 / 梶山 史郎

会員の皆様にはすでにお知らせしておりますように、この度日本肩関節学会ホームページおよびNewsletterのリニューアルを行いました。2022年3月に行いましたwebアンケートの結果を受けて、広報委員会の中で十分に検討を行い、会員の皆様のご意見をしっかりと反映できたものと自負しております。ここで、今回のリニューアル内容に関して少しご紹介させていただきます。

ホームページ

近年はPCだけでなく、スマホ・タブレットからホームページにアクセスされる方も多くなっていますので、新しいホームページはレスポンシブデザイン（画面の大きさを感じ、画面デザインが自動で変化する）を採用しています。トップページのデザインも簡潔で見やすいものとし、アクセス数が多い「お知らせ」や「学会情報」などをメインに配置しています。そしてトップページからすべての



のページへのアクセスがしやすいように、ページの上下にすべてのアイコンを配置しております。また、これまでNewsletterのバックナンバーをそのままPDF形式で掲載していましたが、今回のリニューアルを機に「肩の魅力語る」、「学術論文紹介」、「海外だより」などNewsletterの各コーナーをまとめて掲載するページも新設しております。会員の皆様におかれましては、新しいホームページを是非ご覧いただければ幸いです。

Newsletter

Newsletterの方も、まず一目見てリニューアルを感じて頂ける「表紙」となっております。また近年、新しいコーナーが追加されたことを受けて、Newsletter全体のページ数が増加しております。そのため、後半

のページへのアクセスが悪化していましたので、目次をクリックしていただくことで目的のページまで飛べる仕様になっております。全体のデザインとしまして、できるだけカラー写真を多く配置することで、より見やすいデザインを心掛けています。新コーナーは、会員の皆様からのご寄稿によるものばかりですので、今後も広報委員会よりご執筆を依頼する際にはご協力をいただけますようお願い申し上げます。

会員ページ

今回のリニューアルに伴い、会員ページもリニューアルを行っております。そのため、リニューアル後に会員の皆様が初めて会員ページにアクセスされます際には、一度「会員認証」および「パスワード再設定」の手続きを行っていただく必要がございます。会員の皆様にはお手数をお掛け致しますが、ご理解ご協力の程よろしくお願い申し上げます。また、データ移行には十分注意を払っておりますが、万が一のこともございますので、一度会員ページにアクセス頂き、ご自身の登録情報の確認をお願い申し上げます。

今後も日本肩関節学会が益々の発展を遂げることが出来ますよう、会員の皆様のご協力を頂きながら、ホームページおよびNewsletterもさらなる改善を行って参ります。ご意見ご希望等ございましたら、日本肩関節学会事務局までご連絡ください。

事務局からのお知らせ

このニュースレターが公開される頃には、事務局は2023年度の会計報告、2024年度の予算案の作成などをおこなっていると思います。

先般、2023年度年会費の未納の先生方にはご連絡をさせていただき、納付のお願いをいたしました。引き続きまだ納付をいただいていない先生には、納付をお願いする次第です。

年会費の納付状況につきましては、反映にタイムラグはありますが会員専用ページで確認することが可能です。

2024年前半、個人的には円安の影響で色々な商品が値上がりし、生活品、消耗品や毎日飲むコーヒー、葉物野菜が高くなったりして日々の買い物に悩んだり、さらに大好きな韓国に行って両替すると10,000円が8,500円位にしかならないとか<差額の1,500円でお昼食べれます：コロナ前は10,000円が12,000円位の感覚でした>ありますが、学会運営では1ドル160円になった時は、先生方からお預かりする年会費の半分以上もJSESの購読料として支払わなければならないのかと驚きましたが、財務委員会の報告にもあるように今井晋二先生のご尽力で購読が始まった当初の1ドル120円換算（1年50ドル）として購読できるようになったので安堵いたしました。

また学会事務局を引き継いでから約9年がたちますが、6月中旬に福岡大学→群馬大学と事務局移転時の資料が入った段ボール（約40箱）を会議室に運び込み、約1週間整理を行っていました。

- 第1回肩関節研究会からの抄録集
- 雑誌肩関節(当初は、「肩関節 The Shoulder Joint」)の第1巻から
- 日本肩の運動機能研究会抄録集

- ・ 学術集会終了日の次日に行われていた教育研修会のテキストを在庫を確認・整理・目録を作成し各抄録集の表紙写真を撮って記録に残したり…

肩関節研究会時代から1998年頃のファイルをめくると、事務局と先生方のやりとりは手紙やFAXが主流で（FAXは感熱紙だったので、すでに文字が消えていて読めないものも多数ありましたが）当時、事務局を担当されていた名誉会員の柴田陽三先生、医局の秘書のみなさんのご苦労とご努力が手に取るほどわかり、頭が下がる思いです。

1998年ごろに、「今後のやり取りはメールで行なうことを当時の幹事会で審議」と書いてあったのは、ちょっと驚きがありましたが、そういえばその時代の会社での日報は手書きで、客先に訪問するのも電話でアポイントを取っていたのが当たり前の時代だったなと思いにふけりました。もちろんお詫びも電話か対面で…

そのような時代からの先生方の学会運営のご努力に深く感謝いたします。

現事務局もしっかりとしないといけませんね。

お懐かしい先生の直筆のお手紙や、先生同士のやりとりなど「にやにや」・「ひやひや」・「ドキドキ」しながら整理しておりました。

話は代わり、学会についてご意見等がございましたら、事務局までお知らせください。

編 集 後 記

広報委員会 梶 博則

ニュースレター第22号を最後までお読みいただきありがとうございます。またお忙しい中ご執筆いただいた先生方に厚くお礼申し上げます。本号では新しく、国際論文奨励賞の受賞者の先生方の声をご寄稿いただきました。ご寄稿いただいた先生方は臨床からの疑問を粘り強く研究し、国際的論文を書き上げておられ、その発想と熱意に感服いたしました。ぜひ皆様にもご一読していただきたいと思います。

最後になりますが、担当理事の田中先生、アドバイザーの北村先生、委員長の夏先生、事務局の川村さん、広報委員会の先生方のお力添えにより本号を発刊することができました。この場をお借りしてお礼申し上げます。今後ともよろしくお願いいたします。



編集：一般社団法人日本肩関節学会 広報委員会

田中栄（担当理事）、夏恒治（委員長）、植木博子、大前博路、梶博則、梶山史郎、土屋篤志、西中直也、橋本瑛子、原田洋平、堀籠圭子、美船泰、三宅智、村成幸、北村歳男（アドバイザー）＜2023年12月時点＞

発行：一般社団法人日本肩関節学会

〒108-0073 東京都港区三田3-13-12三田MTビル8階 株式会社アイ・エス・エス内

TEL: 03-6369-9981 / FAX: 03-6369-9982

E-mail: office@shoulder-s.jp / URL: <https://www.j-shoulder-s.jp/>